

坂口安吾と富山

近藤周吾

一

一枚の写真

ここに一枚の写真がある。大雪の積もった雨晴海岸で撮られた一ショットである。

それは下半分が雪の積もった白い海岸、上半分の下部が白い波飛沫をあげる海で、上半分の上部は分厚い雪雲に覆われている。やや明るい一点を除いて。そしてその一点、つまり時計でいう三時の位置から中心よりやや上のところに位置する一点へ向かって細いリボンのような陸——人家が非常に小さく並んでいる——が伸びて行き、最後は水天彷彿する辺りへ吸い込まれるように消尽するという、絶妙な構図によって捉えられたものだ。

キャプションは、こうだ。「冬の日本海。富山縣伏木の外海である。この日はこの地方特別の高潮で、波が路上を洗い通行一時杜絶した。その直後の海である。昔の冬の日本海はいつもこうであったが、終戦後は波静かだ、こんな荒れは珍しくなつた。(安吾)」

富山県民なら知らない人はいない名所なのだが、高岡市北部に位置する雨晴海岸は、浜から眺める岩礁と富山湾越しに見る立山連峰の雄大な眺めが美しく、能登半島国定公園に含まれ、「白砂青松百選」「日本の渚百選」などにも選ばれる絶景スポットである。古くは万葉の歌人・大伴家持がこの風景をこよなく愛し、多くの歌を詠んだ。また、源義経が奥州へ落ちのびる途中、にわか雨の晴れるのを待ったという「義経岩」があり、地名「雨晴」の由来となつたとの言い伝えもあるところである。

キャプションを書いたのは、「(安吾)」とあるのだから、紛れようもなく坂口安吾。一九五五年一月、最晩年の坂口

安吾が、大雪の中、『中央公論』の連載『安吾新日本風土記』の取材でここを訪れたときに撮られたのがこの写真なのである。

『安吾新日本風土記』の初回は宮崎(二月号)、二回目富山と新潟(三月号)だった。三回目の高知でも取材は行つたものの、二月十七日の作者の急死によって掲載は中断された。なお、八月号から大井廣介「ひろすけ新日本風土記」が安吾の遺志を継いだわけだが、どうしたわけか、この事実はあまり知られていない。

先の写真は「富山の薬と越後の毒消し」が掲載された『中央公論』(一九五五・三)と、坂口安吾『狂人遺書』(一九五五・三、中央公論社)に載っている。前者にはグラビアのページがあり、富山や新潟の写真が載っている。先の写真の下には、昔の千石船の模型と一緒に千石船の最後の船長の写真も載っているし、ほぼ近代化されている富山の製薬工場の全景および内部の写真も掲載されている。本文中にも売掛帳の写真が添えられている。

坂口安吾は不思議と写真に縁のある作家で、大袈裟に言えば、よい写真を引き寄せる魔力のようなものを持つていた。林忠彦の撮つた「バーブルパン」での写真や、乱雑に散らかつた書齋での「ショットはとりわけ名高い。その撮影の経緯については、「机と布団と女」(二九四八)に詳しい。安吾は林忠彦だけでなく、濱谷浩にも撮られている。むろん、被写体としてだけでなく、林忠彦が使つていたカメラに触発され、本人もローライコードを愛用していた。最晩年に生まれた長男・坂口綱男氏は、そのローライコードのフアイندرを覗いたことを最初のきっかけとして、カメラに興味を持ち、現在は写真家になつているのだから、やはり不思議な因縁を感じざるをえない。

中村正也

雨晴海岸で撮つた先の一枚は、しかし、安吾が自身で撮

ったものではない。中村正也が撮ったものである。

『中央公論』をよく見ると、「監督 坂口安吾 撮影 中村正也」とある。坂口安吾『狂人遺書』には「装幀 三雲祥之助 写真 中村正也」とある。つまり、カメラマンは、あの中村正也なのだ。それにしても、グラビアページにわざわざ「監督」と記してあるのはなぜなのだろう。

中村正也は、一九二六年横浜生まれの写真家。読売新聞写真部出身、世界映画社、映画スター社等を経て、一九五五年フリーランスとなる。一九五七年には第一回日本写真批評家協会新人賞、一九六六年にはニューヨークアートディレクターズクラブ写真賞などを受賞している。主な写真集に『NOUS JAPONAIS』（一九六〇、フランス、ブリズマ社）や『エマヌード イン アフリカ』（一九七一）がある。『神から盗んだ熱い裸』というキヤッチコピーを掲げた後者『エマ』では、杉本エマという日本の一流モデルをアフリカの大自然に投入し、アフリカの動物や現地人と彼女の白い裸身を灼熱の太陽の下に据えている。中村自身の言葉を引けば、「原始そのままの姿を見せるアフリカの大自然に、土臭さと同時に現代の呼吸を持った女を解き放してみたい……』という動機に発した仕事だった。そもそも「グラマー」という言葉は玉田顕一郎によるものだが、それを石田正子をモデルにした一連のグラマーフォトに高めたのは中村正也である。写真家・中村立行は「われわれが撮っていたヌードは死物だったと思った。ところが彼は女に生命を与えた。この功績はすごいね。」と評している。

（『アサヒカメラ』増刊、一九七九・七）

『アサヒカメラ』増刊（一九七九・七）に、中村正也「1955年・坂口安吾」として安吾の写真が四枚掲載されているが、富山の写真はここがない。「富山の毒消し部落で」とキャプションにはあるが、「毒消し」とあるので「富山」ではなく「新潟」の誤植である。『昭和写真・全仕事SERIES・8「中村正也」』（一九八三）にも、「坂口安吾の旅」

として五枚の写真が掲載されているが、富山の写真だけがない。これは気に入った写真がなかったという可能性もあるが、被写体としての安吾が写り込んでいないからだと思われる。ただ、写真だけでなく、取材の様子を回想している文章が載っていて、参考資料となる。

『安吾さんとは年齢もかなり離れていたが友達付き合いをしてもらえたのは、私の方向が文学とは全く違ったからであろう。その違いによって彼が安心して私と話ができたのではないかと思う。安吾さんの取材の仕方は、運転手、一ぱい飲み屋のおかみさん、宿の女中さん達に、きさくに話しかけ、話を引き出しながら進めていく。身近に肌につれるものから、段々に核心に入っていく、独特の文章を創っていくという具合であった。私のもの見方は、文学的ではなく、そこにあるものはあるものとして率直に見るというものであったが、安吾さんのそういう取材に伴い、写真の上でもシャッターを押すまでの過程の重要さや、捉え方、見方について私なりに吸収することが多かった。』

「監督 坂口安吾」と記してあった理由は、「シャッターを押すまでの過程の重要さ、捉え方、見方」についての何らかの示唆があったからとは考えられないだろうか。「この時期、あらゆる被写体を経験したことは、僕にとつて大きな収穫であった。一回一回の本番が新しい勉強の場で、その経験が次の仕事への裏打ちとなつて自信が生まれてきた。」（「自叙伝」同書所収）とも言っている。

同書の巻末には中村正也の年譜も載っているが、ここにも安吾についての証言がある。

『安吾さんは汽車に乗っても眠らないで景色とか人の動きをじつと見ていた。酒もあまり飲まないでね。顔の分析がくわしくて、よほど興味があったようだ。目的地に着くと、朝市に出かけていって、土地の人の食べているものを調べたりして、生活を分析して、自分の感じたことをメモする。資料調べも綿密だったけど、取材部分の方が多い感じだった

たね。素朴な多くの質問にぶつきらぼうに答えてくれて、非常に仲がよかった。安吾さんは写真嫌いだったから無理に撮らなかつた」

全集の年譜

というわけで、坂口安吾は最晩年に中村正也を伴い、富山県にやってきたのだが、このときは坂口安吾の研究者にとつて自明というわけでもないようだ。というのは、『坂口安吾全集 別巻』(二〇一二)という、刊行が遅れに遅れ、しかしその分、充実を極めたはずの年譜でさえ、《一九五五(昭和三〇)年

一月中旬、新潟、富山を取材旅行。》としか書かれていない。念のため、全集の編集に当たった七北数人『評伝坂口安吾 魂の事件簿』(二〇〇二)も見るが、事情は変わらない。安吾晩年の研究は総じて遅れているが、責任の一端は富山県の研究者にもあるだろう。拙稿「富山の文学―文学とサブカルチャーの」『両輪駆動』も、安吾を逸している。これではいけないと考え、知っている情報をここで補足しておこうと思う。

二

結論

結論からいえば、こうだ。

一九五五年一月一日午後、高岡市を訪れ、伏木を視察、高岡駅前の延対寺旅館に泊まり、『北日本新聞』の取材に応じ、一二日に富山市の広貫堂などを見学した。同行は編集者の竹内一郎、カメラマンの中村正也、案内人の堀田くこの三人である。以下、傍証を記す。

北日本新聞

日付には、『北日本新聞』(一九五五・一・一二水曜日朝刊、七面)に掲載された「熊の胃は精神的に効く、作家の坂口安吾氏高岡へ」というインタビュー記事により、特定した。この記事自体は、すでに若月忠信『坂口安吾の旅』(一九九四)などが紹介済みなのだが、十分に知られていない現状を踏まえ、ここにインタビュー記事の全文を引用しておく。(写真は省いた。)

《作家の坂口安吾氏(四九)は中央公論に連載する「安吾新日本風土記」の資料^レ市^ウ集のため十一日午後雪の高岡市をヒョッコリ訪れ、同市伏木方面を視察のち同市延対寺旅館にくつろいだ。つぎのように「安吾巷談」をおこなった。(写真は語る坂口氏)

◇：ぼくは新潟生まれだからこのくらいの雪にはおどろかぬ。富山へきたのは別にどうい理由もないが、この前宮崎へ行つたとき広貫堂の広告があつたので富山へきたくなつた。熊の胃はぼくには精神的に効くよ。富山の知人では堀田善衛ぐらいで、同氏のお母さんを頼つてきた。

◇：ぼくは相撲が好きで三根山関とフグを食べた時から死なばもろともというわけで友人となつた。人格者ですよ。◇：一般にぼくを酒飲み、ヒロポン中毒というが、酒はいまでも飲めばいくらもやる。ヒロポンというのはまったくウソでアドルムを書くために飲んでる。これでも身体がいいから新潟中学時代からスポーツ万能選手だつた。インタミドルで南部忠平、織田幹雄と争つて優勝した記録があるんだ。もつとも雨のためだつた。》

気候

実はこの記事の隣には、「二十三戸に浸水 伏木、新湊に大浪」という記事も載っている。

「十一日未明から富山湾一帯に高浪がおしよせ、とくに伏木海岸は二十数年ぶりの浪害を受け、新湊でも相当の被害があった。」

伏木国分地方は満潮時の同日午後四時ごろから三メートルの大波となり、約二メートルの防波堤を越えて旧氷見街道になだれこみ三戸が床上浸水、家族は付近民家に家財道具とともに避難、流出のおそれのある家屋にはロープをかけ、地元消防団員が出動警戒した。玉川海岸のボートが流されたり、国分玉川の両海岸の松苗造林三町歩が冠水したという。同様の記事は『北陸新聞』にも見える。

このような大荒れの日に安吾は雨晴海岸へ行つたのであるが、日本海の荒海が似合う、いかにも安吾らしい逸話と言えるだろう。

延対寺旅館

高岡駅前の延対寺旅館に宿泊したことも、『北日本新聞』の記事によって明らかである。延対寺旅館は現在、宇奈月温泉に移転し、延対寺荘というが、ここに今も安吾の色紙「古城の下にすみ歡樂をひさぐ 安吾 延対寺さんえ」(『坂口安吾全集16』所収)が現存している。(現物確認済)

当時、安吾を迎えた大女将の延対寺章子さんは「文士らしい風格があった。旅館の名の由来を尋ねられたことが懐かしい」と証言している。(『越中文学館42 坂口安吾 富山の薬と越後の毒消し 先用後利の力見抜く』『北日本新聞』二〇〇八・八・一八朝刊↓『越中文学館』二〇〇八)

ちなみに、子煩悩な安吾は、宿でくつろぐと、綱男ちゃんへ電話をかけてならわした。坂口三千代、中村正也、竹内一郎が揃ってそう証言しているので、安吾は延対寺旅館からも電話をかけていたはずである。

堀田くに

富山で案内人を務めた堀田善衛の母の名は、くに。作家

・堀田善衛は、婿養子の堀田勝文と、堀田くにの間に生まれた三男である。

堀田くには、一八八八年、伏木の廻船問屋・堀田善右衛門の娘として生まれた。鉄道や道路の発達に伴い、家業は傾くが、二十代には伏木婦女会会長に就いている。

船荷を運ぶいわゆる女仲仕たちは、雪が降る日でも我が子を港の倉庫の軒下や石炭山の間に一日中置き放しにせざるをえない重労働であったが、それを見かねたくには、一九二三年、伏木一宮の念仏堂を借りて無料で子供を預かりはじめた。そして一九二六年、富山県で初の託児所である伏木託児所を開設した。

現在の伏木保育園には、くにの胸像がある。「くに胸像」が保育園の入り口にあり、道路沿いからもよく見えます。託児所は婦人たちが自力で田んぼを埋め立てこしらえたもので、その様子を表現した土木作業のレリーフもあります。」

(萩野恭一「伏木・堀田文学散歩に参加して」二〇一三)一九四二年に厚生大臣表彰、安吾が来る前年の一九五四年には藍綬褒章を受章している。一九六四年に勲五等宝冠章受章。一九八五年没。

安吾はくににも色紙を残したようだが、現物は未確認。

「『安吾新日本風土記』富山の薬と越後の毒消し」取材メモ」に「哺育所の発達」とあるのは、案内人・堀田くにの影響があったかもしれない。

竹内一郎

竹内一郎は、中央公論編集部の編集者。竹内一郎「書かれなかつた安吾風土記(高知県の巻)」(『中央公論』一九五五・四)が取材の様子を証言している。

《連載「安吾新日本風土記」の第三回目に『高知県の巻』を執筆するはずであった。そのために坂口さんは、去る二月十一日から四日間、カメラマンの中村正也さんと私を伴って高知縣下を旅行した。だが、なんということであろう、

坂口さんは、桐生の自宅に歸つたその翌翌日、二月十七日の朝、突然脳溢血のために亡くなられてしまつたのである。≪「安吾新日本風土記」の取材は、坂口安吾、中村正也、竹内一郎のトリオが行つていたのである。富山ではこのトリオに堀田くにかが加わつた。

≪坂口さんが、この仕事の第一回目に日向を選んだのは、坂口さん自身≪高千穂に冬雨ふれり≫で書いているとおり、坂口さんの舊友中村地平氏が宮崎の圖書館長をしているのでいろいろと便利だつたからである。またその南の果ての旅先で「クスリは富山の廣貴堂」の看板をみつけた坂口さんは、遅しい行商の足の本據地を訪問したいという意慾に驅られて第二回目には≪富山の薬と越後の毒消し≫を選んだが、その取材旅行の旅先きは、坂口さんにとつて「繩張りの内とそのすぐ隣り」であつた。そのうえ同行する私にしても、坂口さんの令兄が新潟日報社の會長をしておられることや、富山には作家堀田善衛さんの生家があつて、母堂が健在であるということなどは、心強い限りであつた。それでもなお坂口さんの満足できるような取材はできなかつたのである。≫

堀田くにかを頼りにしていたことがよくわかる。

美人論／写真論

話は横道へ逸れるが、安吾が高知で美人論を展開しているから。ミス高知の小学校の先生と出会つて「ああいうのが本當の美人というものだ」と一番喜んでいたという。

≪「気取りのない、おごりのない、健康な、そのままの姿。たとえ少々目鼻がゆがんでいたとしても、そこに本當の女的美しさがあるんだ。また寫眞を撮る場合でも、特別の衣裳を着て、ことさらにポーズをつけたりするのは愚劣極まりない。たとえどんな美人をモデルにつかつて、着なれない野良を着せて田んぼに立たせても、どこに美しさがあ

しさは農婦にしかありえない。中平さんが、もし明日でも都會の女になつたとしたら、その装いがいくら洗煉されても、おれのいう意味での美しさは消えてしまふのだ」はにかみやの坂口さんは、ろくにミス・高知とは話もしなかつたが、これがその日私の聞いた坂口さんの美人論であつた。≫

しかし、これは美人論というより、写真論だろう。私には修業時代の中村正也に向けられた写真論であるように思われてならない。実際、中村正也撮影「作者亡き安吾風土記」(『中央公論』一九五五・四)にそのミス高知である先生の寫眞があるが、中村正也は安吾の言う通りの美人に撮つている。外で、子どもたちに囲まれる中で歯を見せて板書する先生の笑顔には、わざとらしさ、不自然なところが無い。監督安吾が長生きしていたら、中村正也の寫眞をどう評し、料理したことだろう。

大井廣介

もう一つ道草をするが、中村正也は安吾没後、大井廣介の連載「ひろすけ新日本風土記」にも帯同している。

ただし、初回の佐賀県の巻の撮影は渡部雄吉。ここで安吾&中村の撮つた高知美女と、ひろすけ&渡部の撮つた佐賀美人の寫眞を比べてみるのも一興か。安吾は「監督」を名乗つたが、ひろすけは「説明」となつている。

大井は「ひろすけ新日本風土記」という題に難色を示したというから、安吾の構想をそのまま引き継ぐことができたとはいえないと思われる。安吾が富山と新潟をまとめて相手にしたり、南国と北国を交互に行き来しようとしたらしていたスケールⅡ振幅の大きさに比べると、大井からはどうしても小ぶりの印象を受けてしまう。

とはいうものの、中村正也の寫眞は相変わらず冴えているし、大井も安吾の遺志を汲もうと努力していることは認めてやらなければならぬ。ひろすけ新日本風土記(佐

賀縣の卷)名護屋の秀吉と有明灣干拓(一九五五・八)には「感傷旅行」の四字があり、安吾の家系の発源地である佐賀を選んで行く大井の気持ちに同情すべきだ。

そこで、坂口安吾と大井廣介の二つの新日本風土記を合巻し、中村正也の写真も添えて刊行することを提案してみたい。どこかに目利きの出版人はないものか。

安吾の文章

話を戻そう。

結局、一九五五年一月一日火曜日の荒天下での取材を経て、安吾は「富山の薬と越後の毒消し」における雨晴海岸の描写を次のように完成させるに至った。

《私が富山へ行った日は、この地方でも珍しい荒れであった。吹雪のために汽車もおくれたほどだ。終戦後、日本海は荒れることが少なくなったが、この日は海が大荒れで、私たちは伏木港外の雨晴という海岸へ義經の古蹟を見に行くはずであつたが、海岸の路上に波がうちあげるために一時は通行ができなかつた。その荒波がしずまりかけて、どうやら通行できるようになつたころの風景がグラビヤにのせた日本海の寫眞である。

伏木港外の日本海だ。伏木は裏日本では新潟をしのぐ良港である。しかし北鮮や樺太との航路を失つた現在では全然開店休業の寂しさで、港には一隻の船の姿も見出すことができない。その寂しさは新潟の港も同じことである。北鮮と樺太の航路がなければ用のない港なのだ。一隻も船の姿がなく、クレーンは動かさず、人影すらもない港の風景というものは、まことにやりきれない寂しさに充ちられているものだ。満目死の色である。戦前は軽く六尺は積つた雪が戦後は一尺すらも積らなくなつたというが、それに反比例して生氣の失われた裏日本であつた。

「この旅行は侘しすぎるね」

私たちの旅の足は重かつた。こうして重い足をひきざり

ながら、豫定にしたがつて越後の毒消し部落へ向つたのだが、氣持は減入るばかりで、明るさを考えることができなくなつていた。

「せめて食うことだね」

私たちはどの宿でも日本海の鱈場ガニを注文した。また鱈の子の吸物に舌つづみを打つた。冬の裏日本は美食にみだされている。今晚はあれが食いたい、これが食いたいと、せめて私の考えているのは食べ物のことばかりであつた。《ここでは伝記研究の範囲を越えてしまふので精緻な分析や解釈は差し控えるが、いずれ「富山の薬と越後の毒消し」については稿を改めて論じたいと思う。》

ただ、安吾が中村正也の例の一枚を引用しているという事実だけはここで確認しておきたい。中村の写真を安吾が演出し、安吾の文章を中村が補つているというふうには私に解してみたい。安吾はそのようなグラビヤ時代の新しい紀行文のスタイルを模索していた、と。

要するに、『安吾新日本風土記』は、全集のような文字だけで読むのではなく、初出誌に戻つて、いわば現地へ行ったつもりで読むのが本当だという、ごく当たり前のことを述べているに過ぎないわけだけれども、とはいつても遺著であり編集者の証言もあり、つまるところ安吾の執筆の現場がありありと見えてくる特殊なケースでもあるだけに、あえてそのような自明のことを言つてみるまでである。

さらに踏み込んで一言だけ付け加えると、安吾は若い写真家の撮つた雨晴の写真に(ふるさと)を見ていたのではなからうか。

荒れた海や空(自然)と、存在感の乏しい船や家(人間)というコントラスト。海を介した交易が無くなり、堀田善衛の祖先の廻船問屋は廃業してしまつた。戦後の日本海は最も寂しい場所に変わり果てた。しかも、それは安吾の最初期の「ふるさと」に寄する讃歌から変わらざ一貫して抱き続けてきた一枚のタブローでもあつた。

史料

蛇足ながら、この文章の冒頭の方に「戦争前にふと古本屋の店頭で、「富山売薬業史資料集」という三冊つづきの本をみつけて、特別の必要があるわけでもないのに買いたいもめたこともあった。もつとも先年税務署に本を持って行かれてしまったので、いまは手もとにない。」とあるが、「富山賣薬業史資料集」とあるのは正確には、高岡高等商業學校編纂兼發行『富山賣薬業史史料集 上巻・下巻・索引』（一九三五・三）である。巻頭には安吾も実見したのである。廣貫堂所蔵の「反魂丹」の扁額の写真と箱書が掲載されている、分厚い三冊本だ。当時は売薬についての文献資料がかなり少なかったため、この史料集が手もとに残っていたら、どんな作品になっていただろうかと惜しまれてならない。

とはいっても、坂口安吾が、『風俗越中売薬』（一九七三）や『反魂丹の文化史』（一九七九）の玉川信明より早く、売薬ルポルタージュの分野に先鞭をつけたという事実は揺るぐことがないはずだ。

魚津

最後にもう一つ蛇足だが、実は坂口安吾が富山を訪れたのは、これが最初ではない。一九三四年八月、魚津に滞在したことがある。しかも一か月間も！

『坂口安吾全集別巻』（前出）の「年譜」にも記載がある。

《七月末、皮膚病がまだ治りきらず、友人たちに松之山温泉へ湯治へ行くと言って旅に出るが、結局松之山へは赴かず、八月いっぱい富山県魚津の旧友の「貧乏寺」に滞在

する。》
この根拠は、『紀元』（一九三四・九）に寄せた「無題」である。

《K君。

御便り越中魚津の貧乏寺にて拝読。当所は旧友の今は行ひすました草庵であります。八月一杯滞在。九月にこの坊主の紹介で黒部山中の酒造家へ草鞋わらしをぬぐ予定です。頃しも酒のなんとやらいふ季節であります。さういへば流浪の饑別にと君から貰った酒盃、君の店で最も高価な珍器といふ御自讃であつたが、坊主の意見によれば名古屋製のまがひ物の由、黒部山中の清酒にはちと向きかねるといふ辛辣な眼識でありました。》

若園清太郎『わが坂口安吾』（一九七六）には「昭和九年の七月末のこと、安吾は東京を立つて北陸地方へ放浪の旅に出た。先ず松之山温泉へ行く、と彼は友人たちに言っていたが、予定を変更して富山県の魚津へ行っている。」とあるいは「この寺の坊主は安吾の旧友で、気兼ねなくこの寺に永逗留した。」などの記載が見える一方、「安吾という男は話上手で、時々、ダボラを吐き、大袈裟にものを言つて人を煙に巻く癖がある。」とも書いてあるので、どのくらい信憑性があるのか、判断に苦しむところがある。

『紀元』へ原稿を送っているところを見ると、ダボラとも断定し難いが、現地調査するにしても、当時の書簡が発見されるなど、もう少し手がかりがほしいところである。

【参考文献一覧】

- ・高岡高等商業學校編『富山賣薬業史史料集』上巻・下巻・索引（一九三五・三）
- ・「熊の胃は精神的に効く」作家の坂口安吾氏高岡へ」（『北日本新聞』一九五五・一・一二）
- ・坂口安吾「安吾新日本風土記」（『中央公論』一九五五・二、三）

- ・坂口安吾『狂人遺書』（一九五五・三、中央公論社）
- ・竹内一郎「書かれなかつた安吾風土記（高知県の巻）」（『中央公論』一九五五・四）
- ・大井廣介「ひろすけ新日本風土記」（『中央公論』一九五五・八）
- ・中村正也『エマ ヌード イン アフリカ』（一九七一・九、平凡社）
- ・玉川信明『風俗越中売薬 角風船・柳行李と共に』（一九七三・六、巧玄出版）
- ・『アサヒカメラ』増刊「われら写真世代35年 カメラが描いた戦後風俗史」一九七九・七）
- ・玉川しんめい『反魂丹の文化史 越中富山の薬売り』（一九七九・一二、晶文社）
- ・若園清太郎『わが坂口安吾』（一九七六・六、昭和出版）
- ・中村正也『昭和写真・全仕事SERIES・8「中村正也」』（一九八三・二、朝日新聞社）
- ・京谷準一編著『伏木郷土史年譜』（一九九三・五、発行記載なし）
- ・若月忠信『坂口安吾の旅』（一九九四・七、春秋社）
- ・京谷準一編著『追補伏木郷土史年譜』（一九九五・一一、発行記載なし）
- ・七北数人『評伝坂口安吾 魂の事件簿』（二〇〇二・六、集英社）
- ・北日本新聞編集局『越中文学館』（二〇〇八・一〇、北日本新聞社）
- ・萩野恭一「伏木・堀田文学散歩に参加して」『富山文学の会第四回ふるさと文学を語るシンポジウム報告書』二〇一三・三）
- ・近藤周吾「富山の文学―文学とサブカルチャーの「両輪駆動」」（『日本近代文学』二〇一六・一一）
- ・坂口綱男「繋がる、カメラ回想録 No.4 ローライコード」

（<http://j-camera.net/kaisouroku.php?d=20121025105020>）

二〇一七年二月一日午後七時五〇分閲覧）
 ・『坂口安吾全集』（一九九九～二〇一二、筑摩書房）
 ※引用は、原則として初出に拠った。